

『枕草子』の言説分析(3)

——雅言説の周辺——

武 久 康 高

(二〇〇一年九月二十八日受理)

一 はじめに

以前、稿者は、書き手清少納言のテクスト創造の間に生成している言語主体の諸相について考察を加えた^(注1)。そこでは特に、テクスト上の自己像(「わたし」)の変貌に注目し、前期章段から後期章段へと移行するにつれて、同時代的な撰関家の言説を逸脱し、帝と疑似的な「ミウチ」関係にある「わたし」が語られていくようすを確認した。こうした試みは、言語主体、およびそこで形成される自己像(「わたし」)のありように目をとどめることで、『枕草子』をその生成の過程で捉え、『枕草子』の同時代的な表現位相を検討しようとするものであった。本稿でも引きつづき、『枕草子』における自己像(「わたし」)の様相について検討していくものであるが、今回は特に、「雪山」章段における常陸の介と清少納言との類似性は諸氏が指摘するところであり^(注2)、そこで常陸の介は「後半部の清少納言の鏡像であり、自画像であり」「双生児であった」とされる^(注3)。本稿では、それぞれの登場人物の形象にかかわる言説を明らかにしながら、両者のテクスト上での意味性について

て検討し、そこでの言語主体、および自己像(「わたし」)のありようについて考察を加えたい。

二 常陸の介

二— 「誑惑の法師」常陸の介

常陸の介は、その登場場面において、いかにも乞食尼にふさわしい者として語られている。

二日ばかりありて、椽のもとに、あやしき者の声にて、「なほ、かの御仏供おろし侍りなん」と言へば、「いかでか、まだきには」と言ふなるを、何の言ふにかあらんとて、立ち出でて見るに、なま老いたる女法師の、いみじうすけたる衣を着て、さるさまにて言ふなりけり。

「御仏供おろし」を所望する「あやしき者の声」の主は、「なま老い」て「いみじうすけたる衣を着」た「女法師」であった。引用箇所末尾の「さるさまにて言ふなりけり」を三巻本の表記にしたがい「然ある様」の意とみれば、常陸の介が乞食をする「あやしき者の声」にふ

さわしい様子であったことを（発見）した語りと捉えられよう。つまり、ここでの常陸の介は、乞食をおこなうにふさわしい風貌をした尼として語られているのである。

「かれは何ごと言ふぞ」と言へば、声ひきつくるひて、「仏の御弟子にさぶらへば、『御仏供のおろしたべん』と申すを、この御坊たちの惜しみ給ふ」と言ふ。はなやぎ、みやびかなり。

「かれは何ごと言ふぞ」といつた発言から女房（清少納言）の存在に気づいた常陸の介は、清少納言に対して、みずからは「仏の御弟子」であるため「御仏供のおろしたべん」と申したのに、「御坊たち」が与えてくれないと語る。確かに、通常、「御仏供のおろし」は僧（仏の御弟子）に与えられており、また、僧や乞食に対して施しをすべしといった言表は、説話集をはじめとした仏教言説に散見されるものである。^(注5) さらに、前に確認したような乞食らしい風貌に関しても、仏道者の乞食行為は經典の上で修行の一つとされ^(注6)、説話集では、仏菩薩や聖人が乞食の体をして登場する話^(注7)などが語られている。こうした説話集などの語りを参考にすれば、ここでの常陸の介は、仏教言説にもとづいた乞食の法師らしい風貌をし、発言をおこなっていると考えられよう。

だが、一方で常陸の介は、女房（清少納言）に対して「声ひきつくるひて」語り、そのようすが「はなやぎ、みやびか」と評されている。宮中の女房と思われる人を前にして、それに見合うような発話やふるまいをおこなっているのである。しかし、こうした常陸の介の態度は清少納言を不快にする。

かかる者は、うち倦んじたるこそあはれなれ、うたてもはなやぎたるかな、

乞食する者は「うち倦んじたる」態度こそ「あはれ」を誘うものだ。この考えは、「唯見^レ来乞者^一、可^レ生^レ憐愍^一、和^レ顔悦^レ色、法施財施^一」（『日本霊異記』下巻・撃沙弥乞食以現得悪死報縁第十五）にみられるような、乞食に対して「あはれ」な感情をもち布施をおこなうべし、といった仏教言説にもとづくものだといえる。だが、常陸の介は「はなやぎたる」態度をとる。この落差に嫌悪感をともなう批判がなされているのである。つまり、乞食尼としての風貌をしながら、女房には「声ひきつくるひて」対応する（取り入ろうとする）常陸の介と、あくまで仏教言説にそってみようとす清少納言との間にズレが生じているのである。

さらに清少納言は、「仏の御弟子」と称する常陸の介の「御仏供のおろしたべん」という主張にも批評の目をむける。

「異物は食はで、ただ仏の御おろしをのみ食ふか。いと尊きこと」など言ふ気色を見て、「などか、異物もたべざらん。それがさぶらはねばこそ、とり申せ」と言ふ。菓物、ひろき餅などを、物に入れて取らせたるに、むげに仲よくなりて、よろづの事語る。

引用箇所冒頭の発言は、「仏の御弟子」であるから「仏の御おろし」を頂戴したい、と述べる常陸の介への皮肉となつてゐる。常陸の介が自称する「仏の御弟子」とは、食物を得るための口実だといわんばかりの発言である。一方、こうした清少納言の言行を察した常陸の介は、「仏の御おろし」に固執することなく食欲を前面に出した返答をする。名より実をとるといふわけだが、結果、常陸の介は「菓物、ひろき餅など」を得ることに成功するのである。

さて、ここで常陸の介の形象について考えてみたい。常陸の介は「仏の御弟子」と称し「御仏供のおろしたべん」ことを主張する。また、風

貌も乞食の法師そのものである。しかし一方で、清少納言に対して「声ひきつくるひて」「はなやぎ、みやびか」な対応をみせ、さらに食物を得るためなら「仏の御おろし」に固執することもない。以上のような語りからは、仏教言説を利用する偽法師としての常陸の介像が喚起されるが、こうした法師の存在は同時代の資料からも確認しうるものである。

与「横河公源師桑糸一疋、依「来請」。後日尋問、更無「然僧」云々。昨日来云、先年度々参入奉「仕御祈」。余答云、不「知」面。又云、六ヶ年籠「横川」、今年罷出。為「故源信僧都」、横川僧都廿八日修「佛事」、公源可「調」法服、他物可「具」、柏新絹可「入」者。事依「功德」所「与」也。問「飯室僧都」、云、公源云法師先年死去、其後無「公源云僧」者。件僧重来日、令「問」房名。云、号「東流房」。件房名問「飯室僧都」、横川不「聞」之房名也者。希有奇怪事也。

〔小右記〕寛仁元年十月廿五日条

公源という僧が実資のもとを訪れ、「桑糸一疋」を請うので与えた。昨年たびたび参入し「御祈」をおこなったというが、顔を知らない。六年間横川に籠もり、今年になって下山。故源信僧都のためにおこなう仏事に必要な「法服」を「調」えるという。しかし飯室僧都に尋ねたところ、公源という法師は昨年死亡し、さらに「東流房」なる房は横川にはないということである。ここで実資は「希有奇怪事也」とするが、恐らくは公源という僧を名のる輩に騙されたと考えられる。なお、こうした人を騙すことでよすぎとする偽法師のことを中世では「誑惑の法師」という（日本ノ乞食法師ハ、誑惑ヲモテ道トシテ、渡世シ侍ル」〔雑談集〕巻九、誑惑ノ事）。これを参考にすれば、公源や常陸の介は、法師と称して「誑惑」行為をはたらいていたと捉えられよう。

『枕草子』の言説分析（3）

しかし常陸の介の場合、法師らしく「仏の御おろし」を所望するものの実際は食物であるなら何でもよく、また「はなやぎ、みやびか」といった法師からは逸脱するようふるまふまいをも描出されている。つまり本箇所では、「仏の御弟子」常陸の介の法師らしからぬ側面、いわばその「誑惑」性を露呈するような語りが開示されているのである。

加えて、常陸の介の「誑惑」性の露見に清少納言が関わっている点、しかしその後、両者が「むげに仲よくな」つたと語られている点にも注意したい。通常なら「誑惑」者として追いつき出されてしかるべき「乞食法師」常陸の介が、本箇所においては、「誑惑」性が露見しながらも「菓物、ひろき餅など」を得、さらには清少納言を媒介として共同体内に入り込んでいたのである。いわば清少納言によって、「誑惑」者が共同体につき止められている構図になっているといえよう。

さて、このように「誑惑」性を露呈されながらも共同体に居残った常陸の介は、この後、「誑惑の法師」とは異なる言説とも関わりを持ちつつ語られていく。その子細を次項において検討したい。

二―二 「芸能者」常陸の介

常陸の介は、清少納言と「むげに仲よく」なったことをきっかけに、「若き人々」からも話しかけられる。

若き人々出て来て、「男やある」「子やある」「いづくにか住むなど、口々問ふに、をかしごと、そへごとなどをすれば、「歌は歌ふや、舞などはするか」と問ひもはてぬに、「夜は誰とか寝ん。常陸の介と寝ん。寝たる肌よし」これが未いと多かり。また、「男山の峰のみぢ葉、さぞ名は立つや、名は立つや」と、頭をまるばし振る。

若い女房たちの「歌は歌ふや、舞などはするか」といった問いに対して、常陸の介は性的な俗謡、舞をもつて答える^(註8)。こうした常陸の介の所作は、芸能として、祭の場などでおこなわれるものと同質のものであった。少し時代はくだるが、『雲州消息』の一節を例としてあげる。引用箇所は、「藤原将」と「源拾遺」が「稻荷祭」の見物に行ったようすを語ったところである。

今日稻荷祭也。密々欲見物如何。不能固辞。恐以饗心。相共同乘到七條大路。(中略)又有散楽之態。仮成夫婦之体。学衰翁為夫。摸姪女為婦。始発艶言。後及交接。都人士女之見者莫不解頤斷腸。軽々之甚也。

『雲州消息』卷上本四月
人々があつまる七条大路では、老夫婦が「艶言」を「発」し「交接」に「及」ぶさまを演じる「散楽」がおこなわれ、それを見物する「都人士女」は皆、大笑いする。だが語り手は、これらのようすを「軽々之甚」と評している。傍線部分は以上のようにまとめられようが、ここで演じられている(性)にかかわるしぐさを模した「散楽」が、常陸の介の所作と同質のものであると指摘できよう。なお、この時代は、法師の姿をした芸人も存在していた。このことも、ここでの常陸の介が芸人として語られているとみる一助となろう。

但今日祇園天神会也。而自去年、京中有雜芸者。是則法師形也。世号謂无骨。(『本朝世紀』長保元年六月十四日条)

むろん、多くの注釈書においても常陸の介は、その「はなやぎたる」ふるまいや巧みな話術、歌舞によって(元)芸人や遊女として解釈されてきた。しかし、ここでの常陸の介が芸人や遊女として語られてい

るとすれば、本章段はどのような意味性をもってくるのだろうか。この点を考察するにあたって、少々唐突だが、次の資料をまず検討したい。引用は『平家物語』「祇王」の一節、仏御前が清盛のもとに「推参」する場面である。

仏御前申しけるは、「我天下に聞えたれども、当時さしもめでたう栄えさせ給ふ、平家太政の入道殿へ、召されぬ事こそ本意なけれ。あそび者のならひ、なにか苦しかるべき、推参して見む」とて、ある時西八条へぞ参りたる。(中略)入道「なんでも、さやうのあそび者は、人の召にしたがうてこそ参れ。左右なう推参するやうやある。(中略)祇王、入道殿に申しけるは、「あそび者の推参は、常のならひでこそさぶらへ。」(『平家物語』祇王)

白拍子の名手として「天下に聞えた」仏御前は、清盛から召されないことを残念に思い、「あそび者のならひ」として清盛のもとに「推参」する。ここでは、清盛にすげなく追い返されようとするのだが、祇王の「あそび者の推参は、常のならひ」というとりなしによって対面をゆるされ、その芸によって清盛を魅了する。

ここで注目したいのは、「あそび者のならひ」とされる「推参」という行為である。「推参」とは「招かれもしないのに自分からおしかけていくこと」(『日本国語大辞典』)の意であり、遊女のそれは、貴人のもとに押しかけて芸を披露することを指すのであろう。次に引用する『小右記』の記事にも、遊女の「推参」の例をみる事ができる。

途中自辛崎還御之間待候大津北邊、扈從人々云、遊女副御船(甚無便事也)、祇候女房・上達部・殿上人脱衣給云々。

(『小右記』長徳二年九月三十日条)

東三条院らが石山寺から辛崎經由で還御する際、「遊女」が「御船」に「副」い、「祇候」する女房・上達部らは「脱衣」ぎ与えたという記事である。割注で「甚無便事也」と評されているところからも、ここで遊女の行為は「人の召にしたが」はない「推参」であったことが窺えよう。

さらに、紫野でおこなわれた御遊の座に「召モ无キニ、押テ参タル」曾丹の話もまた、遊女ではないが「推参」と呼ぶにふさわしいものである（『今昔物語集』巻第二十八、『大鏡』昔物語・裏書）。

数巡之後、触物催感有勅、賜和歌座於前頭松下（割注略）、即撰堪其事者、召著件座（割注略）。爰丹後掾曾禰好忠永原滋節等不承召旨加候末座。仍忽被追起。于時兩人低頭、衆人解頤（『大鏡』裏書第六）

「勅」により「和歌」に秀でた者が「和歌座」へと召される。その際、好忠らは「召旨」も承けずに「末座」に「加候」し、たちまち「追起」される。「兩人」の「低頭」れたようすに「衆人」は「解頤」く、といった内容である。これは「推参」の失敗譚、つまり、みずからの才芸をたのみとした「推参」がその場に受け入れられず、結果として笑われ排除されるといった構造だと指摘できよう。

ところで、「推参」に関しては阿部泰郎氏が興味深い考察をしている（註）。阿部氏は『明月記』における『推参』の用例の大半は、公私ともに王の関わる遊宴に際して登場し、さらに「五節の際の『推参』が「儀式の一部として故実化され」ていることを指摘する。そこで、最も頻出する「殿上淵酔」の折の「推参」について検討し、それが「当座の興として芸能を尽し、王の膝下で戯れや逸脱のふるまいが許され」る機会であったとする。また、故実化される以前も「時と場

『枕草子』の言説分析（3）

こそ定まってはいるが」「突発的に始まることを期待される」「堅苦しい座を滑って破目を外すことが許されるような機会」ではなかったかと推測する。ここから、芸能をともなった「推参」という行為に、「この世の身分や社会の秩序」あるいは「物事のあるべき序列を乱し転倒させてしまう」「ちから」を読み取っていくのである。こうした阿部氏の意見を参考にすれば、前に引用した仏御前の「推参」は、清盛の「さやうのあそび者は、人の召にしたがうてこそ参れ」という身分秩序にもとづく規範を「転倒」させ、さらには寵愛までうけることになるなど「推参」のもつ「ちから」が十二分に発揮された例として捉えられ、他方で曾丹の話などは、力量不足にも起因しようが、その「ちから」が秩序側に押さえ込まれた「をこ」話として読みとれよう。

では、常陸の介のエピソードはどうであろうか。本章段での常陸の介は、招かれもしないのに職の御曹司へとおしかけ、若い女房たちが「問ひもはてぬ」うちにみずから歌い舞う。その姿が芸人のそれと同質のものであることは、前に指摘したとおりである。また「衣」を得たのちの拝舞も、宮廷のそれを模した芸人の所作として捉えられる。さらに再度の登場のおりも唐突に職の御曹司へとおしかけ、みずから歌を披露する。こうした常陸の介の姿・行動は、まさに「推参」と呼ぶにふさわしいものであろう。だが、常陸の介の「推参」は職空間において受け入れられない。

いみじうにくければ、笑ひにくみて、「去ね。去ね」と言ふに「いとほし。これに何取らせん」と言ふを聞かせ給ひて、「いみじうかたはらいたき事はせさせつるぞ。え聞かで、耳をふたぎてぞありつる。その衣一つ取らせて、とくやりてよ」と仰せらるれば、「これ賜はするぞ。衣すすけたためり。白くて着よ」とて、投げ取

らせなければ、伏し拝みて、肩にうち置きては舞ふものか。まことにいくて、皆入りにしのち、慣らひたるにやあらん、常に見えしらがひありく。

女房たちと定子は、職空間から常陸の介を排除しようとする。特に、「いみじうかたはらいたき事」「え聞かて、耳をふたぎてぞありつる」といった定子の発言は痛烈である。常陸の介の芸能に関して、全く受け入れるそぶりもみせないのである。むろん清少納言も、「衣」を得たのちの拝舞の所作に「まことにいく」といった感情を抱き、常陸の介の排除に加担している。

これらの点から常陸の介の「推参」は、曾丹の話とどうように、場の秩序を「転倒」させるような「ちから」が秩序側に押さえ込まれた話として意味づけることができよう。だが常陸の介は、曾丹のように一方的に笑われ排除されるのではない。「にくし」という語の頻出が示唆するように、笑い飛ばすのみでは終わらないある種のひっかかり―場の秩序を「転倒」させるような「ちから」―を常に喚起していく存在として語られているのである。なおここで、前半部分の常陸の介が、通常は排除されるべき「誑惑の法師」として語られていたことを想起させたい。こうした常陸の介の存在を飼い慣らさんがために、そのようすは帝つきの女房である右近の内侍の前で演じられている。

右近の内侍の参りたるに、「かかる者をなん、語らひつけておきためる。すかして、常に来ること」とて、ありしやうなど、小兵衛といふ人にまねばせて、聞かせさせ給へば、「かれ、いかで見侍らん。必ず見せさせ給へ。御得意なり。さらによも語らひ取らじ」など笑ふ。

右近の内侍の来訪にともない、定子は常陸の介の言動を小兵衛にまねばせる。ここでは「当座の興として芸能を尽し、王の膝下で戯れや逸脱のふるまいが許され」る「推参」の型がもちいられたながらも、場の秩序を「転倒」させるような「ちから」が抜き取られ、右近の内侍、ひいては帝を笑い楽しませるための「をこ」話として再現されているのである。

だが一方で叙上の語りからは、「推参」者、つまり秩序を逸脱していくような者に対して関心を寄せる定子の姿もまた指摘することができる。「御得意なり。さらによも語らひ取らじ」といった右近の内侍の発言は、「にく」き者として場から排除されるべき者に関心を寄せる定子の姿を、軽口のかたちで端的に表現したものと読みとれよう。常陸の介の芸能に関して、全く受け入れるそぶりもみせず排除する定子であったのだが、他方においては、そのふるまいに興味をもっているのである。

このように定子を中心とした職空間では、「推参」する常陸の介を排除し、それを「をこ」話といった場の笑いへと回収している。またそこには、拭いきれない常陸の介への関心が伏流していた。こうした中であつて清少納言は、いち早く常陸の介に対する同情のまなざしを送っている。前の引用箇所中、常陸の介の歌舞の処遇に関する「いとほし。これに何取らせん」という発言には、そこに何らかの親和性が表明されていると読みとれよう。これは、常陸の介の「誑惑」性を露呈させつつ「むげに仲よくな」った、前半部分の清少納言像からも窺えることである。

では、この両者の間にどのような共通点があるのだろうか。清少納

言は、常陸の介にいったい何を見てとっているのだろうか。そこで次節において、「雪山」章段後半部分の清少納言の形象について検討したい。

三 「すきもの」清少納言

次の引用箇所は、定子と女房たちが雪山存続の期間について議論する場面である。

「これ、いつまでありなん」と人々に宣たまはするに、「十日はありなん」「十余日はありなん」など、ただこのころのほどを、あ
る限り申すに、「いかに」と問はせ給へば、「正月の十余日までは
侍りなん」と申すを、御前にも、えさはあらじ、と思し召したり。
「これ、いつまでありなん」という定子の問いに対し、「ただこのころ
のほど」を答える女房たちと「正月の十余日までは侍りなん」と答える
清少納言。彼女の答えは、定子や女房たちにとってあまりに無謀な
ものであり、当の本人も「あまり遠くも申しつるかな」と発言を後悔
するありさまであった。だが結局、清少納言は「いひそめてんこと」を
貫き、女房たちと議論を続けるのである。

その後、テキスト上では、雪山の存続状態について気にかける清少
納言の姿が頻繁に語られている。そのようすは、雪山の丈が少し低く
なると見るや「白山の観音」に祈るなど「物狂ほし」きさまであった。
ことさら、里に下がって十五日を待つ清少納言のようすは詳しく描出
されている。

里にても、まず明るくすなはちこれを大事にて、見せにやる。十
日のほどに、「五日待つばかりはあり」と言へば、うれしくおぼ

『枕草子』の言説分析 (3)

ゆ。また、昼も夜もやるに、十四日夜さり、雨いみじう降れば、
これにぞ消えぬらんと、いみじう、いま一日、二日も待ちつけで
と、夜も起き居て言ひ嘆けば、聞く人も、物狂ほしと笑ふ。人の
出でていくに、やがて起きゐて、下人起こさするに、さらに起き
ねば、いみじうにくみ腹立ちて、起き出でたる、やりて見すれば、
「円座のほどなん侍る。木守いとかしこう守りて、『童も寄せ侍ら
ず。明日、明後日までもさぶらひぬべし。禄賜はらん』と申す」
と言へば、いみじううれしくて、いつしか明日にならば、歌よみ
で、物に入れて参らせんと思ふ。いと心もとなく、わびし。

暗きに起きて、折櫃など具せさせて、「これに、その白からん所
入れて、もて来。汚なげならん所かき捨てて」など言ひやりたれ
ば、いととく、持たせたる物をひき下げて、「はやう失せ侍りに
けり」と言ふに、いとあさましく、をかしようよみ出でて、人にも
語り伝へさせんと、うめき誦じつる歌も、あさましうかひなくな
りぬ。

傍線部分では、雪山の状態を非常に気に掛け「下人」らに何度も確認
させる清少納言のようすが語られている。そのようすは「聞く人も、物
狂ほしと笑ふ」ほどであったのだが、他方、このように清少納言の行
動が誇張されている点に注目すれば、ここでの清少納言は戯画化され、
読者からも「物狂ほしと笑」われる存在として語られていると指摘で
きよう。いわば清少納言は、勝利に固執する「をこ」として造型され
ているのである。

では、こうした「をこ」なる清少納言はいかなる言説のもとに語ら
れているのだろうか。ここで、引用箇所中の「いつしか明日にならば、
歌よみて、物に入れて参らせん」「をかしようよみ出でて、人にも語り伝

へさせんと、うめき誦じつる歌」(点線部分)という表現に注目したい。つまり清少納言は、雪山の存続時期といった雅なるテーマの議論において、みずからの勝利を意味する「雪山」を「折櫃」に入れ「をかし」き歌とともに披露すること(注10)、またその歌を「人にも語り伝へさせ」ることを、最終的に目指していたのである。くりかえし語られる雪山への「物狂ほし」き固執は、勝利の場でふさわしい趣向とともに和歌を詠むといった、まさに雅世界を体現した人物として振る舞わんがためになされていたといえよう。

こうした清少納言像は、時代は少し下るが「すきもの」といわれた人たちの語られ方と同質のものだと考えられる。例えば、都にいながら「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」という歌を披露するのは残念だと思い、ひそかに籠居・日焼けた後、陸奥へ修行にいったついでに詠んだ歌として披露した能因の話(『古今著聞集』巻第五)、あるいは、殿上人らが花見にいった際、にわか雨が降りだし大騒ぎとなるなか、ひとり実方は雨に濡れながら「桜がり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花のかげにやどらん」と歌う。後日、帝や斉信には称賛されたが、行成には「をこ」といわれた話(『撰集抄』第一九話)などが挙げられよう。これらの話からは、和歌の内容(和歌世界)と詠歌状況(現実)とを重ね合わせ、まさに和歌(雅)世界を体現しようとする「すきもの」の姿(『古今著聞集』『撰集抄』)、またその姿は、一方で「をこ」と評されてしまうこと(『撰集抄』)が窺える。

以上のような「すきもの」の語られ方は、人々から「をこ」と評されるほど雪山の存続に固執し、雅世界を体現した人物としてふるまおうとする清少納言の姿と同質のものだと指摘できる。ここから本箇所

での清少納言は、「すきもの」言説とどうよの語り口によって語られていると考えられよう。

しかし、「すきもの」清少納言の計画は失敗におわる。雅なる議論での勝利にふさわしく、雪山を「折櫃」に入れ「をかし」き歌とともに披露することは、定子の手によって阻止されたのである。だが事情を知らない清少納言は、参内して早速、事の次第を定子へと報告する。

廿日、参りたるにも、まづこの事を、御前にも言ふ。「身は投げつ」とて、蓋の限り持てきたりけん法師のやうに、すなはち持て来しが、あさましかりしこと、物の蓋に、小山作りて、白き紙に、歌いみじう書きて、参らせんとせしことなど啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、

清少納言の口からは「すき」を凝らそうとして失敗した話、いわば「すきもの」の「をこ」話が語られる。こうした「をこ」話をみずから披露することで、定子空間の笑いを生み出していくのである。

ただし、ここで清少納言がもくろんだ笑いと実際に定子空間でわき上がった笑いとは、やや位相を異にするものであった。清少納言が目指しているのは、みずからの失敗譚を披露することによる「をこ」語りである。しかし一方で、定子たちは「共同体の論理を踏みはずしてしまふ」(注11)、「すきもの」としての清少納言を排除し、定子が捨てさせたとも知らずに失敗譚を語る清少納言の「をこ」話を笑っているのである。これは「すきもの」の排除にともなう笑いであると指摘できよう。

四 おわりに — 言語主体の相貌 —

こうしてみると、「すきもの」清少納言の語られ方は、前節で検討した常陸の介のそれと同質のものだといえることができる。これらは共通して、場の秩序や論理を越えてしまうような存在（「誑惑」・「推参」する常陸の介、「すきもの」清少納言）が定子を中心とした共同体から排除され、「をこ」として笑われるといった構造を有しているのである。

この構造の類似性に着目するとき、前節で指摘した、「誑惑」性を露呈させた常陸の介と「むげに仲よ」くなり、排除される「推参」者常陸の介に対して同情の言葉を発するといった自己像の構築も、常陸の介エピソードを語るなかで生成している言語主体が、そこに過去の「わたし」との類似性を感じているからだと考えられる。ここには、秩序を逸脱してしまう者（過去の「わたし」・常陸の介）への親和性が表明されているのである。

だが一方で、両者の語られ方の差異として注目したいのが定子、および帝との関係性である。前述のとおり常陸の介のようすは、定子の指示のもと、帝つきの女房である右近の内侍の前で模倣・再現されている。いわば右近の内侍、ひいては帝を樂しませ、みずからの関心をも満足させるためにおこなわれる定子主催の演劇だといつてよい。しかし「すきもの」清少納言の「をこ」話の際には、右近の内侍の存在は語られず、あくまで「御前」（定子）を樂しませるといった構図になっている。つまり「すきもの」清少納言の「をこ」語りは、定子に向けておこなわれているのである。

だがその後、定子の口から雪山を捨てさせた事実を聞かされ、さらに「すきもの」の存在証明ともいえるべき歌の披露を求められた清少納

言は、「まめやかに倦じ、心憂が」る。心を寄せていた定子に裏切られたというわけだが、一方で、ここにみられる疎外感をともなう「心憂」き感情の表出は、自分とどうように「尼なる乞食」も「衣」を得たことを知った常陸の介の発言にも確認されるものである。ただし常陸の介の訴えは女房らに無視されてしまう。しかし清少納言の場合、その心情を訴える相手として帝が登場するのである。

上も渡らせ給ひて、「まことに、年ごろは、おぼす人なめりと見しを、これにぞあやしと見し」など仰せらるるに、いとど憂くつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。「いで、あはれ。いみじく憂き世ぞかし。後に降り積みて侍りし雪を、うれしと思ひ侍りしに、『それはあいなし、かき捨てよ』と仰せごと侍りしよ」と申せば、「勝たせじ、とおぼしけるなり」とて、上も笑はせ給ふ。

雪を捨てさせた定子の行動から、帝は、清少納言が定子の「おぼす人」だという考えを「あやし」むようになったと告げる。この発言を聞いた清少納言は、ますます「憂くつらく」泣きそうになり、みずからのつらさを帝へと訴える。甘えともとれるこの発言では、「憂き」こととして、「後に降り積」んだ雪を捨てさせた定子の行為について言及している。一連の雪山議論をめぐる、そこでの「憂き」定子のおこないを帝へと訴えるわけだが、これを受けて帝は「勝たせじ、とおぼしけるなり」と笑うのである。ここで帝の笑いを生み出しているのは、雪山議論で清少納言を「勝たせじ」とする定子の姿、たということができるといえる。つまり雪山をめぐる定子は、いわば清少納言と対抗していく存在として帝にまなざされているのである。

このように帝の発言での定子は、他章段のように清少納言を受け止

めていく存在というよりも、むしろ対抗者として示されている。これは、雪山をめぐって定子と清少納言とが同列に競い合う構図を提示したものと見えるが、こうした帝の発言によって、清少納言はそのつらさを慰撫されていく。つまり、みずからのつらさを訴えかけ受け止めてくれるような近い存在として、本章段では帝が最終的に語られているのである。ここには、定子の「おぼす人」としての女房を逸脱し、帝との擬似的な「ミウチ」関係をむすんでいた「わたし」（自己像）の姿が語られていると指摘できよう^(注11)。

以上のことから雪山のエピソードは、競い合う清少納言と定子の姿を笑いながら見守る帝、といった構図のもとに語られているといえる。いわば、帝を中心とした共同体の秩序に定子と清少納言とが包摂される形で本章段は閉じられているのである。ここからは、帝を中心とした世界像のもとに書かれた『枕草子』の表現位相を指摘しようが、この世界像構築に寄与する言語主体の一斑として、ここでも帝と近い「わたし」を生成する主体が、本章段生成のエクリチュールの中に存在していたのである。

注

- 注1 拙稿『『枕草子』の言語主体―帝への『ミウチ』意識をめぐって―』（『日本文学』二〇〇一・二）
- 注2 河内山清彦「枕草子『雪山』の段の構成」（『解釈』一九七六・三）など。
- 注3 三田村雅子「枕草子のウチとソト空間の変容」（『日本文学講座

Analysis of *discours* in *Makura no Sōshi*(3):
The surrounding *discours* of *Miyabi*

Yasutaja Takehisa

The purpose of this study is to examine the relation of the chapter of *Shiwasu no tōyoka no hodon* to *discours* of the Heian period.

Key Words : *discours* , writer - agent

キーワード:言説,言語主体

- 7 日記・随筆・記録』大修館書店、一九八九・五)
 - 注4 『今昔物語集』巻第二十八・第三十六など。
 - 注5 『日本霊異記』下・第十五、『拾芥抄』「諸教誠部」など。
 - 注6 『大乘義章』など。
 - 注7 『日本霊異記』上・第四など。
 - 注8 萩谷朴『枕草子解環』など。
 - 注9 阿部泰郎「女人禁制と推参トラン尼伝承と結界侵犯の物語をめぐりて」（『湯屋の皇后』名古屋大学出版会、一九九八・七所収）。以下、阿部氏の論の引用はすべて同論文による。
 - 注10 「折櫃」の中に雪山を入れ歌を詠む趣向は、和歌世界においても確認できる（『高遠集』一〇九など）。
 - 注11 三田村注3論文。
 - 注12 注1拙稿で、帝との擬似的な「ミウチ」関係をむすぶ「わたし」、およびそこでの言語主体の諸相について検討している。
- ※『枕草子』本文は、和泉古典叢書『枕草子』（増田繁夫校注）。

（指導教官 竹村信治）